
私の1号と博士のネコ

鼎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の1号と博士のネコ

【Nコード】

N0161P

【作者名】

鼎

【あらすじ】

今日も相変わらず退屈だ。

博士は部屋から出てこないし、1号は依然完成の気配が無いし、猫は寝てばかりだし、私は本ばかり読んでいるし。

博士はロボットを作ろうとしている変な人。

1号機はロクに会話すらできない、おまけに頭だけのロボット。

猫。雌で、寝てばかりいる。

私は博士の同居人兼世話係。

今日も相変わらず退屈だ。何か起きないだろうか。

私（前書き）

多分日常モノ。

文学で合ってるのかジャンル…

私

「……よし。さて、1号、質問だ。メロスが怒った理由を言ってみる」

「メロスは怒ったのではなく激怒したのでは」

「……同じ事だろうが」

「同じではない。辞書的な意味では『怒る』のと『激怒する』のは度合いが――」

「あー、もういい。おーい、電源切つて！」

呼ばれた。結局今回も1号はマトモに喋らなかつたらしい。といつても別段失敗するのは珍しくない……というか、成功例は1号が喋った事くらいしか無いのだが。

読みかけの本を傍らのテーブルに置き、安楽椅子から降りた。何故か研究室の中ではなく外に設置されている1号の制御機器に歩み寄り、スイッチやら配線が並んだ基盤をいじろうと手を伸ばす。こういう物は普通1号の隣に置いておくべきではないのだろうか？あと自分で切れよ、とは思ふ。

と、ふと窓の外が目に入った。この家は町の端の端、それもちょっと高い丘の上にあるので、窓を覗けばこの町を一望できる。次世代と呼ばれる時代になって10年以上経つにも関わらず、この町は少なくとも私が住み始めた1年前からは何も変わっていない。雰囲気は町長曰く『20世紀後半のヨーロッパの住宅街』らしいが、あいにく私は20世紀後半のヨーロッパ住宅街の雰囲気を知らないのでもこの件についてはノーコメントにしておこう。立ち並んだ一軒家とちよつとした雑貨家、役場程度しか無いものの、何故か何度見ても飽きない魅力が窓からの風景にはあった。

「おい、なーにやってんだい！」

博士が怒り気味で部屋から出てきた。3日ぶりに姿を見たが、無精髭と髪の跳ね具合で清潔感がまるで無い。すこし後ろの方では1号が『がーがーがー』等とバグよろしくイかれた言葉を発していた。

「あー……ありや？」

何時間風景の魅力に取り付かれていたかと思い時計を見る。6時。もちろん午後のだ。2時間近く放心していたらしい。それに気づいたのか、博士は呆れ顔だった。

「……また黄昏てたのか……」

「あー……ごめんなさい」

語尾を弱くする。特に反省しているわけではないが建前上こうしておいた方が良さだろう、と思った私は腹黒いのだろうか。

「いいから、夕飯」

「その前にお風呂に入ってもらいます」

「うい、猫と入るか。猫どこ？」

「散歩でしょ。いいからとっと入ってくださいな、匂いがアレです」

「……はいよ」

渋々浴室へ向かう博士。実は猫はベランダで寝ているのだが、生憎彼女と入る特権は私のものだ。あとでゆっくりともふもふ戯れよう。

……さて、夕飯を作らなければ。何作ろう？

私（後書き）

こんなクオリティで申し訳ないorz
ちなみに博士は2〜30くらいのおっサンです

1号(前書き)

今更だけどこのタイトルはねーよな、と思った。

1号

「えーっと、これが『りんご』」

「『ブレイザー』」

「お前わざと言ってんのか。『りんご』な、『りんご』」

「『アツポオ』」

「……………」

殴りたくなつた。こいつの頭の中はどうなっているのだろう。

今朝起きて下に行くと、博士の姿が無かつた。ついでに猫の姿も無いので一緒に散歩にでも行ったのだろう。猫の散歩とは聞いたことが無いが。

特に変わった事も無い朝だと思っていたら、いつもは鍵のかかっている研究室の扉が開いているのに気づいた。博士は自分以外の入室は許さなかつたはずなので、閉め忘れたのだろう。几帳面な性格（といってもチャック全開だったり部屋自体はごちゃごちゃしていたり等、研究以外の事は大雑把のようだ）の博士にしては珍しい事だつた。

で、その時私は気づいた。いや、気づいてしまったのだ。電源が入れっぱなしの状態で研究室の中央に置かれている1号に。

その後の私の行動については言うまでも無い。ちなみに博士からは『研究室の中の物は絶対にいじるな』と言われていたので、何もいじらずに1号に言葉を教えてやっている。セーフだね、博士？
しかし小一時間ほど色々な単語を教えてやっているが、おそらく何一つ1号の脳内には浸透していないと思われる。そもそも私は1号の電源のオンオフ管理しか行った経験が無く、何をどうしてやればいいのかもわからないのだ。なのでとりあえず博士が1号と話しているときのようによつてみてはいる。

博士と1号の対話している時には毎回思うのだが、こんな事に意味はあるのだろうか？ 『こんな事』とは、博士自信が一人で1からロボットを、それもただのロボットじゃなく、人格を持つロボットを作ろうとしていることだ。そういうロボットを作り出すことなら、そこらの大企業が遥かに優れている。もちろん趣味としてロボット製作を持つ人も多く存在するが、『人格』を個人が作ろうとするのは馬鹿げているのだ。

しかも、博士はそれを百も承知らしい。本当、何を考えているのか掴めない人だ。何故そこまで固執するのだろうか？ 「人」を作り出すことが悪い事だとは思っていないが、もし1号がこのまま長い年月を……下手をすると壊れるまで中途半端な、未完成の「生」を続けることになる可能性がある事を考えると、多少なりとも胸が痛む気がする。

「……なんでだろうね、ホント」

「『なんでだろう』」

「それは大昔の芸人じゃん」

「ナイスツツコミ」

「おっ、初めてマトモに喋りやがったなコイツ……って、初成立会話がこんなのか……」

早く完成させてやりたい。たとえ何年もかかっても。初めてそう思った。

「サンキュー」

「心を読んだだと!?!」

「イングリッシュフォーエバー」

意味が分からない。バグったのだろうか。

結局博士は黄昏時まで帰ってこなかった。何処に行ったたのか聞くと、猫の元気が無かったので病院へ行ってたとのことだった。猫

が単に機嫌が悪かったただけらしいのは良かったが、連絡くらい入れるよダメオヤジめ。やはり変なトコでテキトウだった。

あまりに慌てて戸締り諸々を忘れていたらしい。研究室の扉が開きっぱなしだったのもそのせいだろうが、言わない方がいいだおる。あの後研究室の扉は閉めておいたのでバレてはいない。1号に妙な変化が無ければ言いいのだが。

「いやー、悪かった。猫たんの具合が悪そうだなー」

「『たん』って付けんな。風呂沸かしてあるから入って来い」

「チエツ、お前が俺の立場でも同じ事したたる？」

「否定はしないし出来ないが戸締りだけはするよ。いいから風呂に

……」

「はいはいッ」

もう時間も遅い。夕飯はカップラーメンでいいか。

博士（前書き）

3週間ぶりだと…？
なんかスンマセン…orz

博士

「水素」

「……そ……ソ ッドスネーク」

「クロアチア」

「あ……アルマイル」

「それ言ったぞ」

「えー！ じゃあアン ニオ猪木！」

「それ最初の方で俺が言った」

「……！ ア、アン ンマン！」

「よし勝った。さ、1000円」

『ミツシヨン・インポッシブル』。そんな単語が浮かんできた。

博士はこういう知識量とか、発想力を使うゲームにはめっぼう強い。おそらく常人では敵わない程に。それでも私は自分から挑んでしまったのだ、この怪物兼小遣い巻き上げ機に。

時は私が昼食を作り台所へ向かった所まで遡る。相変わらず研究室の中では一人の男と一台のロボット（仮）が格闘しているようで、今やその雑音も気にならないほどまで生活の風景に馴染んでしまっていた。

今日は何を作るのか、と冷蔵庫を開いた時。

突然開いた研究室の扉と怒鳴るような博士の声が聞こえたのは同時だった。

「おい、しりと『り』！」

「……は？」

意味不明。『り』が強調されていたのでとりあえず彼がしりとりをしたいのだけは分かったが。

ちなみに背後では1号が「トマトトマトトマトトマトトマトトマトトトマトトマトト」と連呼していた。もはや畏怖の域である。

「……えーと、リンダリダ」

「ダ ロップ！」

「プルツー専用 ユベレイ」

「イノセン ・ゲリラの祝祭！」

二人の温度差と著作権がヤバい。分かる人にしか分からないだろうが。

「……何？しりとり？」

「ああ。1号としりとりしてたんだが、あの野郎トマト連呼するだけだな」

「しりとりする前にもっと根本的なところを変えたら？」

「あ、お前今しりとり馬鹿にしたな？」

少し顔を……なんとこのだろう、仏頂面というかしかめっ面と
いうか、そんな感じにゆがめた。

「……え、しりとりそんなに大事？」

「馬鹿野郎！しりとりなめんな！」

なめてはいないが。それにしても何だろうこの興奮度は。

「簡単でしょ、しりとり？」

「……いいだろう、じゃあ俺としりとりで勝負だ。負けたら罰金1000円な」

「待て待て、色々おかしい」

「なんだ？ 負けるのが怖いのか？ このチキンめが！」

私は挑発に乗りやすい。なので、以下どんな会話がなされたかは省略する。

とにかく博士はマインドコントロールというか挑発が得意で、私は負けず嫌いというか挑発にのりやすかった。

故に今私の財布から1000円氏が殉職された。認めたくないものだな、自分自身の若さゆえの（略）

「くそ……っつか博士がお金使つトコ見たこと無いんだけど。何に使うの?」

「あ? 飾る。部屋に」

相変わらずの変人だった。

……昼食は何にしよう。とりあえず今日の彼の食事は1000円
分手抜きにするという事は決定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0161p/>

私の1号と博士のネコ

2010年12月15日21時40分発行